

# Mi stelojn jungis al revado

verkita de Mikaelo Bronŝtejn  
eldonita de Impeto, 2016  
564 paĝoj

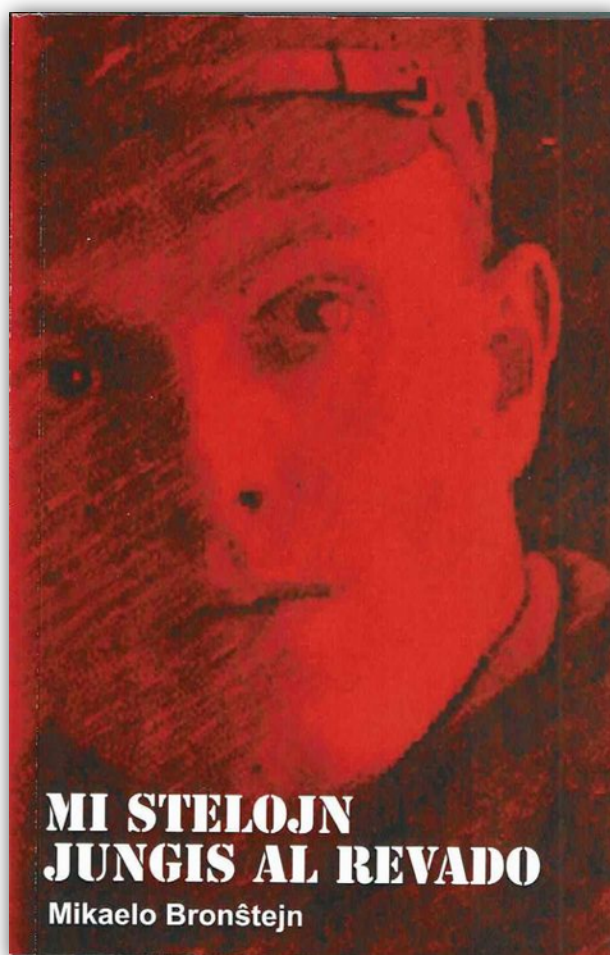
エスペラントと関わりがあるというだけの理由で、いつなるとき秘密警察がやってきて逮捕されるかもしれない。ふつうの市民がそんな恐怖のなかで身をすくめて生きざるを得なかった時代があった。1930年代のソ連である。本書は、ロシア革命当初は希望と高揚感に満ちていたエスペランチストたちが、スターリン主義の確立とともに、次第に恐怖と絶望の淵に突き落とされてゆく過程を息詰まる迫力で描き出した小説である。

主要な登場人物は、1917年のロシア革命から1937年の大粛清にかけてソ連で暮らしていた5人の男女である。彼らの生まれはシベリア、ウクライナ、ラトヴィア、フランス等とさまざまで、職業も農民、工場労働者、教師、軍人、ジャーナリストと多様であった。共通点は、1926年にレニングラードで開催されたSAT (Sennacieca Asocio Tutmonda) の大会に参加したことで、それ以後、彼らはそれぞれ苦難に満ちた人生を歩むことになる。また、その過程で彼らの生の軌跡は複雑に交錯してゆく。壮大な構想のもとに語られた564ページに及ぶ大作である。

他方で、歴史に残る実在の人物も登場する。レーニン、スターリン、トロツキーなどの革命家、政治家のほか、著名なエスペランチストのドレーゼン、ランティ、秋田雨雀、ミハルスキなど多彩である（ちなみに、各章の扉にはミハルスキの詩が引用されている。表題も彼の詩の一節に由来する。ただし、原詩（1921）では“Mi stelojn jungos al revado”と未来形であったものが、表題では“Mi stelojn jungis al revado”と過去形に改められている）。

とりわけ、影の主人公ともいべき存在がドレーゼンである。彼は革命直後に、かつての「ブルジョア」エスペランチストたちを追放し、共産党組織にならった組織SEU (Sovetrespublikara E-ista Unio) を立ち上げ、さらにはアナキストやSAT一派を追放して、組織の頂点に君臨した。表紙には、いかにも聡明そうではあるが、不吉な印象をも与える若きドレーゼンの写真が使われている。

作中では、ネップ、農業集団化、飢餓、キーロフ暗殺事件、大粛清など、物語の背景をな



す同時代の大事件について、登場人物たちが不安げに噂話を交わす。やがて1937年に大粛清が勃発するとともに、登場人物のある者は逮捕され、拷問のあげく処刑される。ドレーゼン自身もトロツキストとして逮捕されるが、処刑前夜に獄中で自らがなしたことの意味をめぐって自問自答するシーンは緊迫感に満ちている。辛くも生き延びた者もいるが、彼らも内面に消えない傷を負うことになる。

その他にも本書はさまざまなエピソードが満ちており、とりわけ登場人物たちの職業生活、家庭生活が仔細に描き出されていて興味が尽きない。ある者は、ユダヤ人たちがクリミアに設立したコミュニティ（キブツ）に移住し、さらにパレスチナに移住する。また、ある者は軍人として中央アジアに派遣され、バスマチ（ムスリム住民による反ソヴィエトの武力闘争）と戦ったのち、スペイン市民戦争に軍事顧問として派遣され、将軍マンガダとともに人民戦線側に立ってフランコ軍と戦う。そうしてフランス共産党の機関紙「ユマニテ」の特派員として派遣された女性と再会し、恋に陥る、などなど。モスクワ、レニングラード、パリ、マドリッド、クリミア、パレスチナ、中央アジアと舞台も多岐にわたっている。

ところで、スターリン主義によるエスペラント運動に対する弾圧を扱った著作としては、先ごろ改訂版が刊行されたUlrich Lins“La danĝera lingvo”（2016）が直ちに思い浮かぶ。また、E. Borsboomの“Vivo de Lanti”（1976）は、ソ連におけるSATとSEUとの確執を扱っている（私事ながら、30年以上も前、同書を故坪田幸紀氏と毎週少しずつ読んだことが思い出される）。これらは、スターリン主義体制がすでに過去のものとなった時代に書かれた歴史書である。しかし、まさに同時代を生きていた人物にしてみれば、時代の趨勢は混沌として見通しがたかっただろう。とはいえ、彼らが当時どのように感じ、考えていたかを知ろうとしても、歴史書からは必ずしもその内面は伝わってこない。その意味では、本書はフィクションであり「事実」そのものではないとはいえ、文学的想像力を駆使しつつ同時代を生きた人びとの体験や内面に肉薄していて、スターリン時代の歴史の立体的な理解のためには極めて有益であろう。また、各所に当時のエスペラントやロシア語などの雑誌記事が引用されていて、現在進行中の出来事が当時どのように報道されていたかを知ることができる。

作者はこの作品を完成するために20年以上の歳月を費やしたという。簡単に読み通せる作品ではなく、この小文も上っ面をかいたにすぎないが、数週間あるいは数か月に費やす覚悟で、その作品世界に浸るならば、必ずや忘れがたい読書体験になるだろう。

（La Movado 2017年5月号掲載。）

（追記）

表題のもととなっているミハルスキの詩は、ウィリアム・オールド編のEügeno Miĥalski “Plena Poemaro”（Flandra Esperanto-Ligo, 1994）に収録されている（p55）。